

夕ごはんたべた？(下)

田辺聖子



んたべた?

(下)

田辺聖子

タコはんたべた？

(下)

一九七五年九月二五日 印刷

一九七五年九月二〇日 発行

著者 田辺聖子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話 (業務部) 03-2661-5111

(編集部) 03-2661-5411

振替東京四一八〇八

印刷 二光印刷株式会社

製本 新宿加藤製本株式会社

定価 七五〇円



© 1975, Seiko Tanabe
Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが本社通信係宛御送付
下さい。送料本社負担にてお取替えいたします。

夕こはんたべた？
(下・目次

ああ 蒸発……………7

大学助教授富士子女史は無邪気に言った。「ほんとに、時々蒸発したくなりますものね、人間で。あたし六ちゃん二人なら、いつでも蒸発したいわ、ねえ、六ちゃん！」……

ああ 結婚……………61

三太郎博士がまたまた考えついたのは「夫婦毒消し論」である。夫と妻が仲よければ、かなりな苦勞を凌ぐことができるのではないか、ということである。しかるに……

ああ 浮気……………109

「でも、われわれとしては、モテない方が気はらくね。パパは何のとり得もないけど、そっちの心配ないだけが、キズに玉、ってところかな」と妻はいいたいほうだい……

ああ 夕ごはん……………160

「お父さん、僕も一緒にご飯たべるから」三太郎は息子の顔も見ず、「お母さんにいうとけ」といい捨てて夕刊を掘っていた。妻の顔はうれしさに輝いている……

ああ 持ち合い……………212

三太郎は以前、妻と旅して何が面白い、と思っていたが、今は違う。妻との旅は旅情が深まる。もしかしたら人生の旅愁と輪が重なり合っているからかもしれない……



装幀
本文挿絵
辻
司

タゴはんたべた？

(下)

ああ 蒸発

三太郎は大吉より玉子に対してぶんぶんしているようにみえる。

「外をほつき歩いていいるから、こんなことになる」と玉子のせいにする。

「あたしにわかるもんですか、まさかそんなこと……」玉子は息子の部屋へいこうとした。

「いま行っちゃって、おれへん」

「出ていったんですか？」

話を聞くところである。

夜の診察時間のころから、大吉の部屋ではステレオがどんどんと鳴りひびいていた。尤もこのころは、近隣も盛り場だけに人の出盛る時刻で、さしてひびかないのだが、しばらくして静まったと思うと、丸子が妙な顔をして下りてきた。

タエちゃんはお休みなので、三太郎ひとり仕事をしているところだった。

「大吉の部屋からへんな臭いするわよ、お父さん」と丸子はいう。

「へんな臭い？ 煙草でどこか焦がしとんのんちゃうか」

三太郎は、大吉の部屋でいつか見た吸殻の山を思い出す。「丸子、中をのぞいて見てやれ。あの阿呆、何をするやらわからん」

三太郎は、大吉に対し、警戒心を解いてはいないのである。不信感と猜疑心が執念ぶかく心に巣くっている。三太郎はデリケートでこわれやすい心情をもつ人間なのである。いったん、人間の信頼関係にヒビがはいったら、たとい親子といえども、警戒心が旺盛になるのである。

丸子は首をふる。

「ううん、アタシ、あけてみたけどあかへんのよ。内からカギをかけて返事もせえへんわ。大吉だけじゃないみたい」

「おいおい、ボヤでも出したら困るがな」

「焦げくさい臭いとちがうのよ。シンナーやないかな」

丸子は無造作に、

「この間もボンドの瓶が大吉の部屋にいくつもころがってたわ」

といつて、部屋を出ていった。

「おい、お母さん帰つとんのか」

娘の背へ、三太郎はいう。それはまるでとりすがるような口調にひびく。

「まだ帰つてなら」

こういうときに限つて妻はおらぬのだ。三太郎は、妻に對して怒り心頭に発する。

そうこうするうちに患者が来たので、三太郎は氣になりながら仕事をしていたが晩酌の楽しみはおじやんになつてしまった。

仕事を終つたので彼は仕方なく二階へいった。三太郎がそのとき考えたのは、

（社会主義の国はええなあ）

ということである。

（子供、生まれたら片っぱしから公共の教育施設に抛りこみよる。国が責任もつて面倒みよる。あれ、親は楽やろうなあ）

という、痛切な羨望である。

三太郎は息子の部屋へいつてみた。

しんとした音もしない。どないなつとんねん、と三太郎はドアを叩いてみた。と、ぷんと臭う。あきらかにシンナ

ーの臭いである。

氣がつくと、それは廊下中にただよっている。

この臭いには、誰だつて氣付かぬはずはなからうのに、テル伯母の居間からはテレビの音が洩れ、ヤス子やテル伯母の笑いがひびくのだ。丸子も自分の部屋のドアを内から閉めてしまつていた。

父親に通報しておけばそれですんだ、という感じである。三太郎はゆえ知らず、絶望的な感じが胸にひろがってくる。みんなバラバラの家なのだ。

「大吉、あけなさいー」

三太郎はドアを叩く。そうして、（早よ、日本も社会主義国になつてピオニールとやらが出来へんもんかなあ）と思う。

親が子を叱るのはあたり前、とか、愛の鞭などというのはよくいわれるが、しかしそれも人により、誰にでもできぬ。三太郎のように心のきめのこまかい、氣よわな平和主義の人間にはむづかしいことである。人には向き不向きがある。

廊下に胸をむかつかせる異臭がたちこめていた。三太郎は力まかせにドアを引きあけた。

部屋の中の空氣が、石油色にみえるほど曇つてよどみ、

ベッドや畳の上にうずくまっていた少年が二三人、こっちを見た。

三太郎は窓をあけ、

「こら！ 何をしとるか」

と一喝すると、二人の少年は飛び上って、部屋からかけ出した。まだふらふらしている。最後の一人は逃げようとして、体の自由がきかず、泳ぐような恰好で匍い出して、敷居につんのめった。三太郎は衿がみをつかんで、

「シンナーは、君、罪になるんやぞ」

とゆすぶり、すると少年はあたまがぐく揺れて、めろめろの口調で舌をもつらせ、

「し、しってます」

という。

何が「知ってます」や。

三太郎は、若者の常套語の中で「知ってます」というのが一ばんきらいである。先輩や年長者が何か注意すると「知ってます」「聞きました」という。而うして、その本質については何も知ってはいないのだ。そのくせ、口答えだけ一人前にする。三太郎はヨソの息子であるが、その少年のあたまを一つ、撲ってやった。

「やめろよ」

と、大吉がうしろから三太郎を遮る。こいつは、わが家の息子であるから、あとでゆっくり撲るつもりだ。もはや暴力の何のといっていられない。

大吉は父親の腕にとりついて友達を庇おうとしていた。

しかし息子の方も目がとろんとして、体はふらふらである。三太郎はそれを見ると腹が立って、友達の方の手を放し、大吉をつかまえて頬を撲った。しかたない、まだ日本には、子供達をひとまとめに集めて教育してくれる機関がないのだから、製造・発売元が一手に引きうけて全工程にタッチしなければならない。

三太郎は思うに、テレビのホームドラマでよくたくさんの家族が仲よく暮らし、ワアワアいつている、あれほど、ありうべからざること、いまだきないように思われる。

「ミナソノ徳ヲニセンコトヲコヒネガフ」というのはついに、大昔の教育勸語にあるだけのこと、当今は大ภายในといえども、てんでんばらばらが普通ではないのだらうか。大家族はいたずらに費えを増し、家長が心を勞するだけである。

三太郎が息子とやさもっさしているあいだ、二階の部屋から誰ひとりでてこず、やっと、テル伯母の部屋のカーテンがゆれて、中学生のハル子が出て来たが、これはまっ

すぐ廊下の端のトイレにゆく。

しばらくして水洗の音をひびかせて出て来たが、ふしぎそうにこちらに一べつをくれただけで、またいそいで、部屋に入ってしまった。テル伯母の部屋にテレビがあるのだ。また、その部屋から笑い声がひびく。それは三太郎には、

「人は人、我は我なり、されど仲よき」

という文句を思い知らされるが、いまのところ、三太郎は、人は人・我は我というような手合いとは仲よくやりたくない気持である。

一緒に怒ったり嘆いたりしてほしい。

そうして、それができるのは妻しかない。

しかるに妻は、附け焼刃の教養を仕入れるため、ウカウカフラフラと出あるいているのだ。

これが家長として怒らずにいられるか。

大吉は三太郎の手をくぐりぬけ、あわてて階段を下りてゆく。三太郎が、こら、という間に出ていってしまった。

黙然と酒を飲んでいるときに、玉子が「ねえパパ」と帰ってきたのだ。腹のたつ女だ。教養も講義もクソくらえ、という三太郎の心境である。彼は息子に対する怒りを妻にふりむけているのである。而うして、息子にどなったり撲ったりはおっくうだが、妻には言いたい放題、怒りたい放

題でできるような感じなのである。玉子は大吉に怒っていた。

「なんでそう、次々に、あの子はバカなことするんでしょ」

玉子は顔付きまで変っていた。

「安心した頃に悪いことするのね」

「閑歇温泉みたいな奴ちゃ」

玉子は二階へ上った。しばらくすると、ズックの鞆をもつて下りてきた。

「ほら、パパ」

鞆の中はビニールの袋とボンドの瓶で一ぱいだった。三太郎はちらと見て平静にいう。

「あんな奴、死んでもたらええねん。イヤ、これは失敗でした、いうて四つに畳んでまた元の所へおさめるわけにはいかんか」

玉子は夫の訝^きえない冗談につきあつていられない。

「児童相談所へ電話してみましようか」

「あれでも児童かねえ、ハハハ」

「笑いごとやないですよ、パパ！」

「せめて笑わなされるか、あほらしいて！」

と夫婦はいがみあった。

（何というても夫婦ですわ）というのは、ケンカするためものののように玉子は思われた。

翌日、玉子は電話帳で調べ「児童相談所」というのが本当にあるのを知った。ゆうべは、この名を新聞か何かで見ただけな気がしたから、つい口に出したまでであるが。

玉子は思いきって電話をかけてみた。シンナーを吸うような子供は、どうしたらいいんでしょう、というような、我ながらとりとめもない質問である。

出てきたのは、若い女性の声だった。

「おいくつですか？」

「十九でございます」

「ウチは、小さいお子さんを対象にしております……」

女性の声に当惑がまじった。

「精神衛生センターがございしますが、そこへお問い合わせになったらいかがですか」

玉子は礼をいって、ついにて電話番号も聞いた。女性は、玉子が家は阪神間にあるといったので気を利かせたのか、大阪と神戸の双方を教えてくれた。

玉子は、少しでも知合の少ない方がよいと思い、神戸の方へかけてみる。こんどはすぐ、若い男が出てきた。玉子がぐどぐどいうのを遮って、

「どんな状態ですか？ いま」

「今はおられません。ゆうべ出ていって帰っておりませんが……あの、こういうややこしいのを、収容して癖をなおして頂く所はないのでしょうか」

「こちらは、よっぽど重症で兇暴な性癖があるとか、手に負えないとかいうような精神障害者ですと、収容するのですが、未成年で、しかも一回二回、かくれて吸うというような……」

男は考えているらしかったが、

「中央補導所へ問合せてみられたら、いかがですか」

とまた、番号を教えてくれた。

朝の診察がはじまっているので、三太郎はいそがしくしていた。はじめ、ひとしきりだけ、忙がしいのがつねである。玉子が奥へひっこんで出てこないの、三太郎は自身、受付へ出てカルテをさがしながら、

（ほんまにスカタンなアホや。用のあるときそばにおらず、ない時に来よる）

と心中、舌打する。

しかし、夫が舌打して、スカタンの、アホの、と罵れるのは、ひとえに妻だからであって、妻のほか、誰を罵れようか。

今日び、子供だとして、目の前で大喝叱咤などできない。

妻だからこそ、「何しとんねん、ボヤボヤすな！」などといえるのだ。三太郎は、妻が奥から出て来たらそういつてやろうと思ひながら診察をつづけている。

一ばんはじめに、例の、新聞を読みくるはきもの屋の隠居、二番目が地主の家のスエ婆さん、ここらは長者番付ではないが、だいたい動かぬところ。

その次が、乱暴な沖仲仕のおっさん田中である。

「おい！」

と診察室のドアを排して入ってくるなり高飛車にいう。

三太郎はむっとして、

「何や」

「いったい、こんなもんの治療にやな、いつまでかかっとんねん、早よ癒^{なほ}さんかい！」

「そういうもんは長いのんや。一年二年、つづくのがある。引っこんだらまた出たりする」

三太郎はぶっきらぼうにいう。男は、

「しかし、シュッと一吹きして消えてまうようなクスリ、でけとんのんちゃうか」

「そういう薬は、ないです。それに、薬というものは、あまり効きすぎると必らずというてええほど、副作用がある」

「しかし、やな。医者は病氣なおして商売しとんのやないけ」

こういう患者のうるさは、三太郎も二十年ここにいるから慣れているが、じっさい、愉快ではないものである。

「え？ そやないか。ほたら、なんでこの病氣が、オマエ、なおらんねん、効かん薬ばかり出しやがって」

田中患者はすこし、焼酎くさい。朝から飲んでいきまいているのへ、まともに相手になっていられない。

「オマエ、テレビ見てたらやな、こないして……」

と彼は手つきで示してみせた。

「シュッとかけたら、スーッと濕疹^{しつじん}がなおったやないか」

「あれはなあ、宣伝やさかい、あないうまいこと、いくねん。現実とテレビのコマーシャルを混同してもろたら困るなあ」

三太郎は、そんなテレビのCMを見たことがなかったが、そういった。

「コマーシャルとちがう。ほんまにあってん」

「そんなテレビ、しとったか」

「あった。記録映画や」

「ほほう。それは見てないな」

「医者のくせにもっと勉強せんかい」

「どんな映画や」

「土人のな、島へいって、その島の皮膚病多いさかい、白人の人間いって、医療班がいてやな、シュッとクスリ、かけたりよるねん。ちよっとの間で、すぐ癒つとった」

「土人」と、現代の公害に汚染された近代都会の住人とは比較にならない。

「それはしやアないな。土人は今までクスリなんかつけたことあらへんねんよって、よう効くねんやろ」

「そうか」

「そんな奴、メリケン粉練って塗っても、よう効くかもわからへん」

「いや、な、ああいうクスリ、現代発明されとんのん、ちやうか思て」

と田中患者はくどくいう。くどいのは、こんなうるさがる患者の特性である。

「皮膚病は、クスリのほかに、精神的なもん、あるよってな。あんまりイライラしたりハラたてたりすると、なおらんぞ」

「ほうか」

「あんたいま、血相かえて入ってきたやろ」

「うん」

「あんなんすると、よけい悪うなるねん、おぼえとき」

「ほんまけ」

うるさいが、こういうのは、また単純でやりやすい点もある。

田中患者は納得してかえったが、三太郎はいたく不愉快である。あと味わるいのだ。玉子がやってきたので三太郎はムーとしている。

いったい、医者の仕事は嬉しゅうてたまらん、という性質のものではない。

身すぎ世すぎのわざともなれば、どの商売もそうであるが、仕事の相手はみな愉快ならざる愁訴を抱えている人々である。氣ぶつせいな表情をしているからこっちの氣持も浮かっているわけにいかぬのである。それに、さっきのようになわからず屋もいるのだから、慣れていても、時折は、ゆううつになる。

玉子は何だか、中央補導所へ電話をかけたという話をしていた。じつくりした中年の男の声で、こんど現場をみつけたらすぐ電話してほしい、ということだった、という。

「電話したらどないなるねん」

「つかまえにくるんでしょ」

「留置するのか、いや未成年やから鑑別所へいくのかな。

しかしそんな形式的なこととしても……」

「結局、家庭でよく指導して下さい、といわれたわ」

三太郎は不快なので、返事しないで、患者のとぎれめを、新聞をよんでいる。(とぎれ目の方が多い) 妻は薬局でしきりにしゃべっていた。

「子供さんを信じてあげて下さい、というの。どうも警官あがりの人みたいな感じやったわ。とても、親切でおちつくて……」

「……」

「どんなに悪いことをしても、結局、親の胸へ、息子さんは帰ってきます、といわれるの」

三太郎は帰っていかないのだ。あんまり戻そうという気はない。

「何べん裏切られても信じて下さいって。子供さんとの根くらべです、といわれたわ。もしかしたら、シンナーが罪になるということもよく判らなくて好奇心から吸うてるのんちがいますか、いっぺんお宅へ行って、薬やシンナーのこわさを、私、話してもよろしい、というてはった。じゅんじゅんと、親切にねえ……あたし、またご相談にいきます、といいました」

ヒトの子やさかい、親切にいえるねん、と三太郎は思う。何べん裏切られても信じて下さいというのは、ヒトには言いやすが、自分の場合は不快である。子供、というより三太郎には全く別個の人格にみえる。

三太郎は夜の診療も、あまりいい気分ではなかった。夏のこと、アセモやクサをいっぱい出した赤ん坊や、汗に汚れた子供たちがくる。赤ん坊は烈しく泣いて首を振って、三太郎にさわらせない。

「ちょっと押えて」

と若い母親にいうと、

「痛そうやもん、かわいそうで……」

とハラハラして子供の首筋を押えることもしないのだ。

赤ん坊はますます、そっくり返って泣く。昔の日本のお袋は、必要とあれば、子供が泣き喚いていようと叫んでいようと、ギョッと押えつけて動かさない強さがあつたが、今はヘンに甘くて、却って子供に引きずり廻されているのが多い。

三太郎が、夜になって「おいで」へゆくべく、玄関を出ると、出たところで木田ハンにばったりあつた。

人の顔を見おぼえられぬ三太郎は、見たような顔だと思